

シナリオ：模擬裁判「白雪姫」

監修 鈴木博康

シナリオ作成 2019年度専門演習A・B ゼミ生

2019年度の本学夏季のオープンキャンパスにおいても、例年同様、当職の担当する専門演習A・Bのゼミで模擬裁判の企画・運営に当たることとなった。専門演習の「模擬裁判ゼミ」を当職が担当するようになって以来、「本能寺の変」、「桃太郎」、「浦島太郎」、「3匹のこぶた」、に続く、5つ目の模擬裁判である。

以前、本誌24巻3号（2018年3月）の拙稿「法学部教育における模擬裁判の実践例」において、本学模擬裁判の取り組みについて紹介した。この時にシナリオへの関心が寄せられ、25巻1・2号合併号（2018年12月）では、前作の「3匹のこぶた」のシナリオを示した。今回ここに紹介するシナリオは、「白雪姫」である。模擬裁判ゼミも5年目ともなると、学生側においてもそれなりの蓄積もある様子で「効率化」が進んでいる。というのも、学生たちのシナリオ作成の様子を見ていると、要領がよくなってきたのか、先輩たちの過去の作品を「利用」するなど、定型化してきた部分も散見されるからである。

2019年度のオープンキャンパスは、8月3日土曜日に行われた。昨年度のオープンキャンパスのスケジュールも、春学期の授業がぎりぎりまで開講され、翌週から定期試験が始まるという、学生にとっては大変な時期に重なっていたが、今回は前日8月2日金曜日から定期試験がすでに始まっており、週明け以降も引き続き定期試験期間が続くという、学生にとっては昨年度以上に悩ましい時期となった。記して学生たちを讃えたい。

以前の拙稿において示した通り、今回も既存の昔話・物語を題材にこれを刑事事件化するという方法でシナリオ作成に取り掛かった。継母が白雪姫の美貌

に嫉妬するあまり、いやがらせをし、ついには毒リンゴを食べさせるものの、小人たちや王子により九死に一生を得るという物語の基本軸をもとに展開した。学生たちは、白雪姫をリンゴアレルギー体質であると設定し、これを知っていた継母が、アナフィラキシーショック死を起こそうと、殺意を以ってひそかにリンゴ入りカレーを食べさせた、とするのが公訴事実である。

今回のシナリオでは、事件の背景に親子関係がベースにあり、学生自身がまたその設定した多感な白雪姫の年齢とさほど離れておらず、実際の経験や見聞に基づいた、学生ならではの視点・関心がよく表れていたのではないかと思う。また、これまで同様、証人の宣誓もなされているが、擬人化した証人の鏡については元の物語の「魔法の鏡」とはせず、嘘をつかずに何でも真実を語る「真実の鏡」として設定していたりするあたりには、学生らしいユーモアが感じられるところでもあった。

オープンキャンパス当日の企画は、例年とほぼ従来通りの運びとなったが、定刻通りに前の企画が進行したほか、当初の計画時点から模擬裁判には昨年よりも長めにプログラムが予定された関係もあり、これまで時間の関係で実施できないままであった、結審後のフロアでの討論（評議）をわずかではあるものの取り入れることができた。さらには、その結論をもとに、主文の言い渡しと理由も簡単ではあったが、その後の判決公判として続けて行うことができた。今回フロアでは単純多数決で、無罪という判断になったために、判決公判も無罪のシナリオで演じることとなったが、当然ながら、学生たちは当日の判断が有罪もありうることを想定して、あらかじめ有罪の場合のシナリオも用意していた。今回紹介するのは当日の進行通り「無罪パターン」のシナリオである。もっとも、終演後、廊下での出演者一同お見送りの際に、見学者からは、有罪のパターンのシナリオにも興味があるとしてその内容を乞われはしたものの、裁判の結果が無罪となった以上、示すことはしなかった。ここでも無罪のシナリオのみ掲載する。

従来通り、観客には、傍聴人の「役」をやってもらうほか、今回もフロア

から法曹役などの参加者を募った。最終的には、司会進行のゼミ生をはじめ、配役にはゼミ生、参加者とも、裁判官3人、検察官3人、弁護士3人、証人3人と被告人、書記官のほか、刑務官も用意できた。今回は初めて刑務官を2人にすることができ、よりリアルになったのではないと思う。

なお、証拠請求、証拠調べの手続きをまとめている（書証、物証、人証の扱い）のはこれまでと同様で、傍聴人である観客へのわかりやすさ、上演時間などの演出の都合から、演劇的側面を優先した部分がある。

また、前回、法廷教室の備品や掲出物についての動向を紹介したが、今回の機会を利用してその後の動きを示すべく、改めて末尾に写真を掲載しておく。

※今回のシナリオについても、高大連携の取り組みで県立高校の勉強会において「白雪姫リターンズ」として模擬裁判の再演を予定していたが、新型コロナウイルス感染症対策（COVID-19）の事情から中止になった。脱稿後の動きとして記しておく。

開廷・人定質問

被告人が刑務官に連行され入廷してくる。刑務官が解錠の上、被告人とともに席に着く。やがて、裁判官が登場。

裁判長「それでは、被告人 ^{びま}美魔・ジョオウ に対する殺人未遂被告事件の審理を始めます。被告人は、前に立ってください」

被告人、証言台の前に立つ。

裁判長「名前を何と言いますか」

被告人「美魔・ジョオウ です」

裁判長「生年月日はいつですか」

被告人「1963年12月9日です」

裁判長「仕事は何かしていますか」

被告人「女王です」

裁判長「本籍はどこですか」

被告人「東京都 ^{ちよだく}千代田区 ^{ちよだ}千代田1番1号 カリオストラの城 です」

裁判長「住所はどこですか」

被告人「本籍と同じです」

起訴状朗読

裁判長「それでは検察官、起訴状を読んでもください。被告人はよく聞いていてください」

検察官、起訴状を朗読する。

黙秘権の告知、被告人・弁護人の陳述

裁判長「ここで被告人に注意しておくことがあります。被告人には黙秘権という権利があります。答えたくない質問には答えなくてかまいません。最初から最後までずっと黙っていることもできます。質問に答えても構いませんが、法廷で話をしたことは、あなたにとって有利な証拠にも不利な証拠にもなりますからよく考えて発言してください。ただし、黙秘というのは、黙っているということであって、積極的にうそを言うことが認められているわけではありません。わかりましたか」

被告人「はい」

裁判長「そこで質問しますが、先ほど検察官が読み上げた起訴状の内容はその

通りで間違いないですか」

被告人「私が娘の白雪姫にリング入りのカレーライスを調理した事実はありますが、それは嫉妬からではなく、娘を思っただけのことです。また、白雪姫がリングアレルギーを持っていたことも知りませんでした。しかし、知らなかったとはいえ、娘を生命の危険にさらしてしまったことは、悔やんでも悔やみきれません」

裁判長「弁護人の意見はいかがですか」

弁護人「被告人の主張と同様です。被告人がリング入りカレーライスを作ったことに間違いはありません。しかし、被害者がリングアレルギーであると判明したのは、2003年の12月頃であり、被告人が美魔・オウと婚姻したのは2018年11月5日で、じき夫美魔・オウが死亡したため、被害者のリングアレルギーを被告人自身を知ることはありませんでした。本件は、被害者のリングアレルギーを知らなかったことが原因で起きた不幸な事故であり、被告人の行為に殺人の故意はありません。したがって無罪を主張します」

裁判長「被告人は席に戻ってください」

被告人、元の席に戻る。

冒頭陳述

裁判長「それでは検察官、冒頭陳述を行ってください」

検察官、冒頭陳述書を読み上げる。

裁判長「続いて、弁護人は弁論要旨を述べてください」

弁護人、弁論要旨を読み上げる。

証拠請求

裁判長「検察官、証拠請求を行ってください」

検察官、証拠等関係カードに基づいて、説明を始める。

検察官「検察官が請求を行う証拠は、証拠等関係カード記載の各証拠であります。

まず、検1号証は、被告人 美魔・ジョオウの^{こせきしょうほん}戸籍抄本 です。

検2号証は、被告人宅から押収されたリンゴ です。

検3号証は、意識不明になった白雪姫の胃の内容物の鑑定書 です。

検4号証は、被害者白雪姫の診断書 です。

検5号証は、証人として ミラー・^{かがみ}鏡 さんです。

検6号証は、同じく証人として 小人5号 さんをそれぞれ請求します。

ミラー・鏡さんは被害者に関する被告人の発言内容、小人5号さんは被告人と被害者の関係について確認したいと思います」

裁判長「弁護人、何か意見はありますか」

弁護人「検1・2・3・6号証は同意します。検4・5号証については、予断を与えかねないものですから却下して下さい」

裁判長「検1号証から検6号証まで、すべて証拠採用します。弁護人からは何かありますか」

弁護人「弁護人からは、事故当時ジョオウの家臣として仕えており、被告人からリンゴ入りカレーライスを白雪姫の家まで届けるように頼まれた^{じょういえおみ}城家臣 さん を証人として請求します」

裁判長「検察官、意見はありますか」

検察官「不同意です。必要性を感じません」

裁判長「弁護人、^{じょういえおみ}城家臣 さん についての^{りっしょうしゅし}立証趣旨は何ですか」

弁護士「事故当時の被告人の様子や、事故以前の被告人と白雪姫の親子関係の様子について確認したいと思います」

裁判長「わかりました。弁護人の請求する証人についても採用します」

証拠調べ

裁判長「それでは証拠調べに入ります」

検察官、りんごと各書面を書記官に提出する。書記官は、それらを受け取り、裁判長に渡し、そのあと、書面の写しを弁護人にも渡す。各人、証拠類を眺める。

続いて検察官から証拠の説明がなされる。とくに、診断書によれば白雪姫が重度のリンゴアレルギーであったこと、胃の内容物であるカレーの中からリンゴの成分が検出されたこと、白雪姫はリンゴを摂取したことでアナフィラキシーショックを起こし危うく死にかけたこと、現在も意識不明で入院中であること、また、被告人宅から押収したリンゴが今回カレーに使われていたものと同一種であること、など。

裁判長「被告人は、前に立ってください」

被告人、証言台の前に立つ。

裁判長（被告人にリンゴを示しながら）「このリンゴは、あなたの家にあったものですね」

被告人「はい、そうです」

裁判長「このリンゴを使ってカレーを作ったのですね」

被告人「はい」

裁判長「このリンゴはもう要りませんね」

被告人「はい」

裁判長「では被告人は、元に戻ってください」

被告人、元の席に着く。

裁判長「証人のミラー・鏡^{かがみ}さんは出廷していますか」

検察官「はい、在廷しております」

裁判長「それでは証人は中に入ってください」

証人ミラー・鏡、バーから中に入ってきて、証言台の前に近寄る。

裁判長「証人、証言台の前に立ってください。名前は何と言いますか」

証人ミラー「ミラー・鏡^{かがみ}です」

裁判長「生年月日は？」

ミラー「1908年11月30日です」

裁判長「職業は？」

ミラー「ジョオウ様の鏡です」

裁判長「住所は？」

ミラー「東京都 千代田区 千代田^{ちよだ}1番1号 カリオストラの城 です」

裁判長「それでは、これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかないという宣誓をしていただきます。傍聴人も起立してください。その紙（＝宣誓書のこと）に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、ミラー、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとか

なた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求められた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは検察官どうぞ」

検察官「あなたは被告人とどのような関係ですか」

ミラー「私はジョオウ様の寝室で鏡をしているほか、真実の鏡でもあり、嘘を言うことはできません。そのため、ジョオウ様はいつも私に問いかけをし、私は尋ねられたことを見極めて正直に答えていました」

検察官「被告人が被害者を殺害しようとしたと聞いてどう思われましたか」

ミラー「あの事が原因なのかと思って、とても焦りました」

検察官「あの事、とは」

ミラー「はい。以前からジョオウ様はよく私に『真実の鏡よ、世界で一番美しいのは誰でしょうか』と尋ねられ、その都度私は『ジョオウ様です』とお答えしていましたが、オウ様がお亡くなりになってからというもの、ジョオウ様は酷くやつれてしまい、美貌にも陰り^{かげ}が見えるようになりました。その頃、同じ質問をされましたので、私は『白雪姫です』と真実を伝えました」

検察官「それと今回の事件に何の関係があるのですか」

ミラー「はい。私が『白雪姫です』と真実を伝えた際に、ジョオウ様は今まで見たことがないくらいに顔を歪ませ、私の前から立ち去りました」

検察官「なるほど。それで被告人は被害者に殺意を持っていたと思ったのですね」

ミラー「いえ、私はジョオウ様の寝室から動くことは出来ないためそこまでは分かりません。ですが、今回の事件を聞いてもしやと思ったので……」

検察官「なるほど。その後何か変わったことはありましたか」

ミラー「変わったことですか……そういえばあれ以来、何度も繰り返して、私に一番美しいのは誰かと尋ねてくるようになりました」

検察官「その時あなたは^{なん}何と答えましたか」

ミラー「私は真実しか伝えることが出来ないため「白雪姫」と答えました」

検察官「すると被告人はどうしましたか」

ミラー「その時も顔を歪ませて部屋から立ち去っていきました」

検察官「ありがとうございました。検察官からは以上です」

裁判長「それでは弁護人、^{はんたいじんもん}反対尋問はありますか」

弁護人「被告人は被害者がリングアレルギーであること知っていたのでしょうか」

ミラー「さあ、分かりません。ジョオウ様はそのことについては何も話さなかったのです」

弁護人「以上です」

裁判長「では裁判所からお尋ねします。事件当日も同じ質問をしてきましたか」

ミラー「はい、してきました」

裁判長「その時は^{なん}何と答えましたか」

ミラー「やはり「白雪姫」と答えました」

裁判長「分かりました。では証人、お疲れ様でした。戻っていただいて結構です」

続いて、証人 小人5号が出てくる。

裁判長「証人、証言台の前に立ってください。名前は何と言いますか」

証人 小人5号「小人5号です」

裁判長「生年月日は？」

小人5号「1951年7月5日です」

裁判長「職業は？」

小人5号「木こりをしています」

裁判長「住所は？」

小人5号「千葉県 ^{うらやすし}浦安市 ^{まいはま}舞浜1番地1 小人の家 です。」

裁判長「それでは、これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかないという宣誓をしていただきます。傍聴人も起立してください。証人はその紙に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、小人5号、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとなあなた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求められた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは検察官どうぞ」

検察官「あなたは被告人のことを知っていますか」

小人5号「はい。白雪姫からよく話を聞いていましたし、ときおりカリオストラの城まで様子を見に行ったこともあります」

検察官「では、あなたが被告人と被害者が不仲だと思った理由を教えてください」

小人5号「はい。ジョオウ様と白雪姫はよく電話をしていました。その度に白雪姫は『マジありえないし、絶対ママあたしの事嫌ってるでしょ』と話していました」

検察官「その言葉を聞いて被告人と被害者が不仲だと思ったのですか？」

小人5号「はい」

検察官「なるほど。では、事件当日について聞かせていただきます。あなたは事件当日何をしていましたか」

小人5号「落ち込んでいた白雪姫を元気づけるために、朝からタピオカミルクティーを買いに行っていました」

検察官「なぜ落ち込んでいたのですか」

小人5号「はい。前日の夜に白雪姫がジョオウ様と電話をしていたのですが、途中で白雪姫の怒った声が聞こえてきたのでそれが原因だと思います」

検察官「どのような声ですか」

小人5号「最初は『うるさいなー』とか『あたしには関係ないし』などと少し苛立っている程度だったのですが、段々と声が大きくなってきて最後は『うるさい！あたしもママなんて大っ嫌い！！』と大声で怒鳴っていました」

検察官「つまり、被害者が電話越しに声を荒げ最後は自分も被告人のことが嫌いだと言っていたのを聞いた、ということですね」

小人5号「はい。そして白雪姫はいつもジョオウ様と喧嘩をすると元気がなくなり落ち込むので、今回もそうだろうなと思いました」

検察官「いつも、と言うことは普段からよく喧嘩をしていたのですか」

小人5号「はい。あのお二方はよく喧嘩をしていました」

検察官「なるほど。ありがとうございました。検察官からは以上です」

裁判長「弁護人からは何かありますか」

弁護人「被告人は今までに白雪姫の元を訪ねてくることはありましたか」

小人5号「いいえ、ありませんでした。ですがよく差し入れと称して、お小遣いはもちろん、洋服や食べ物などを白雪姫のために頂いておりました。この前も取れたての新鮮な野菜を頂きました」

弁護人「なるほど。弁護人からは以上です」

裁判長「続いて裁判所からお尋ねします。先ほどよく差し入れとして食べ物が届くと言っていましたが、今までの差し入れの中にリンゴが入っていたことはありましたか」

小人5号「いいえ、リンゴが届いたことはありません」

裁判長「では、証人は下がっていただいて結構です」

続いて、証人 城家臣が出てくる。

裁判長「証人、証言台の前に立ってください。名前は何と言いますか」

証人 城 家臣^{じょう いえおみ}「城 家臣です」

裁判長「生年月日は？」

城 家臣「1983年 4 月15日です」

裁判長「職業は？」

城 家臣「ジョオウ様^{かしん}の家臣です」

裁判長「住所は？」

城 家臣「東京都 千代田区 千代田 1 番 1 号 カリオストラの城 です」

裁判長「それでは、これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかないという宣誓をしていただきます。傍聴人も起立してください。証人はその紙に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、城 家臣、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとなあなた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求められた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは弁護人どうぞ」

弁護人「あなたは事故当日何をしていましたか」

城 家臣「いつ呼ばれてもいようにジョオウ様の近くで待機しておりました」

弁護人「リングについては何か言っていましたか」

城 家臣「とても美味しいリングが手に入ると喜んでいました。白雪姫様にも食べさせたいと言っていました」

弁護人「被告人がカレーを作っていたとき、何か変わった様子はありませんか

したか」

城 家臣「とくに変わった様子はありませんでした。むしろ、ウキウキしたような感じでカレーを作っていました」

弁護人「では、被告人があなたにカレーを渡した時の状況を教えて下さい」

城 家臣「ジョオウ様が私にカレーを届けるように仰せられた際、気を付けて運ぶようにと忠告を受けました」

弁護人「どうしてそう言ったのですか」

城 家臣「ジョオウ様が自らお作りになったカレーを白雪姫様に召し上がっていただくためだとおっしゃっていました」

弁護人「その時、被告人の表情はどうでしたか」

城 家臣「喜んでいらっしゃいました。ジョオウ様は白雪姫様に対して愛情を注いでおりましたので」

弁護人「白雪姫さんのために愛情を注いでカレーを作ったのですね」

城 家臣「はい。難しい年頃の娘にしてやれることはこのくらいしかない、とおっしゃっていました」

弁護人「被告人は被害者がリンゴアレルギーであることを知っていましたか」

城 家臣「はっきりしませんが、ジョオウ様は料理をお作りになることはほとんどなかったので、ご存じなかったと思います」

弁護人「ほとんど料理をしないということは、何か作っていたこともあったのですか」

城 家臣「はい、シチューとパイを作られたことがあります」

弁護人「ありがとうございます。弁護人からは以上です」

裁判長「それでは検察官、^{はんたいじんもん}反対尋問はありますか」

検察官「今、パイを作ったことがあるというお話でしたが、^{なん}何のパイでしたか」

城 家臣「確かイチゴだったと思います」

検察官「パイと言えバリンゴが思いつくのですが、どうしてイチゴを選んだのですか」

弁護人「異議^{いぎ}あり。これは検察官^{けうさくかん}の誘導尋問^{ゆうどうじんもん}です」

裁判長「質問を続けてください」

城 家臣「イチゴは白雪姫様の好物だと、ジョオウ様がおっしゃっていました」

検察官「そうですか……。検察官からは以上です」

裁判長「裁判所からはありません。証人は下がっていただいて結構です。ありがとうございました」

被告人質問

裁判長「これから被告人質問をします。被告人は、前に立ってください」

被告人、証言台の前に立つ。

裁判長「まず弁護人からどうぞ」

弁護人「あなたは、今、白雪姫さんについて、どのように思っていますか」

被告人「婚姻後すぐに父親を亡くしてしまったので苦労がないように大切に育てていました。ですが、娘がリンゴアレルギーとは知らなかったとは言え、このような結果になったことは悔やんでも悔やみきれないです」

弁護人「事故当日の3月25日、あなたはどこで何をしていましたか」

被告人「朝起きてから自宅で真実の鏡を見たあとにカレーの準備^{いえわみ}をして家臣に届けるように頼みました」

弁護人「そのカレーを作るときにリンゴを入れましたか」

被告人「もちろん入れたわ」

弁護人「なぜ、カレーにリンゴを入れようと思ったのですか」

被告人「前日にちょうど美味しいリンゴが手に入ったから隠し味として入れただけよ」

弁護人「カレーを届けるのに自分で届けずに家臣^{かしん}に届けさせたのはなぜです

か」

被告人「白雪姫とは親子関係があまりうまくいってなかったの。だけど、私は親として離れて暮らす娘のことが心配で、家臣にカレーを届けるのと一緒に様子を見てもらうために行かせたわ。家臣は私のことをよく聞いてくれるから」

弁護人「ありがとうございました」

裁判長「検察官は何かありますか」

検察官「当日に鏡を見たと言っていました、その時何かしましたか」

被告人「いつものように世界で一番美しいのは誰かと質問したわ。まあ、白雪姫と言われたけどね」

検察官「あなたは本当に白雪姫さんがリングアレルギーだということは知らなかったのですね？」

被告人「知ってたら入れるわけないでしょ！」

検察官「わかりました。以上です」

裁判長「裁判所からはありません。被告人は元の席に戻ってください」

被告人、元の席に着く。

論告・求刑、最終弁論、最終陳述

裁判長「検察官、論告・求刑を行ってください」

検察官「被告人は、夫を婚姻後早くに亡くし、一人で白雪姫を育てるという重圧があったとは言え、自己の嫉妬心から身勝手にも白雪姫を殺害しようと犯行に及んだものであります。被告人は、白雪姫が重度のリングアレルギーであることを知りながら意図的にリング入りカレーを作ったものであります。本件の殺害計画については、リング入りカレーを作る際に、第三者にわからないようにリングを細かく裁断するほか、目視においてリングの識別ができ

なくなるまで煮込み続けています。さらに、被害者に親心からの差し入れであると装い、家臣^{かしん}を使い小人が家におらず、丁度お腹がすく昼食時に配達させるなど、一見偶然が重なっただけのようにも装っています。本件が発覚してからもなお、反省している様子は微塵^{みじん}も伺えず、情状は極めて悪質であります。以上のことは、検察官提出の各書面・物証・証人から十分に立証できております。相当法条適用のうえ、被告人に対して懲役10年を求刑します」

裁判長「弁護人、最終弁論を行ってください」

弁護人「被告人は、偶然美味しいリングが手に入り遠方^{えんぽう}に住んでいる白雪姫にも食べさせてあげたいと考えカレーの隠し味として使用したに過ぎず、また白雪姫がリングアレルギーであることを元から知っていたのであれば、リングを使用することはなかったと被告人も述べております。日ごろからのいさかいも、難しい年頃の娘との親子関係が原因であり、ましてやこれから殺意を引き起こすと考えるのはあまりにも論理が飛躍しすぎています。本件は偶然に偶然が重なった単なる事故に過ぎません。被告人は無罪です」

裁判長「被告人は前に立ってください」

被告人、証言台の前に立つ。

裁判長「最後に何か言っておきたいことはありますか」

被告人「ええ。私は白雪姫のことを夫が残してくれた宝物だと思っていますわ。しかし、私たち親子はしっかりとコミュニケーションを取ることが出来なかった。そのせいで大切な娘をこんなにも苦しい思いをさせるなんて母親失格だと私は思っていますのよ。裁判が終わった後も私の愚かさに向き合いながら、白雪姫が目覚めたら力一杯抱きしめて親子として一から絆を深めていけるように一緒に暮らしていきたいと思っていますわ」

裁判長「以上ですか」

被告人「はい」

裁判長「次回公判は、判決を言い渡します。期日は8月3日、11時30分とした
いと思いますが、弁護人、検察官よろしいでしょうか」

弁護人「はい」

検察官「はい」

裁判長「それでは被告人は、8月3日11時30分、出廷してください」

被告人 美魔・ジョオウ、再び手錠をされて連れられて帰る。

判決公判

前回期日と同様、被告人 美魔・ジョオウ、入廷後、解錠されて刑務官とともに席に座り、
やがて裁判官が登場。

裁判長「被告人は、前に立ってください」

被告人 美魔・ジョオウ、証言台の前に立つ。

裁判長「それではこれから判決を言い渡します。主文、被告人は無罪」

裁判長「理由。被告人において被害者白雪姫がリングアレルギーだということ
を知っていたという事実を証明する検察官の証拠はなく、殺害動機と考えら
れている嫉妬に関してもミラー鏡証人の証言には真実の鏡とは言え1つとし
て確かなものはない。被告人と被害者白雪姫が頻繁に喧嘩していた事実が認
められるが、年頃の白雪姫にとって父親を亡くし新しい母親である被告人と
喧嘩するのは十分考えられることである。そして、城家臣証人の証言によれば、
被告人美魔ジョウオウは白雪姫のことを心配して頻繁に差し入れや様子
を見に行かせたことが明らかである。これらの事から被告人美魔ジョウオウ
が被害者白雪姫のことを大切に思っていることがうかがえる。(中略)

……。」

裁判長「以上の次第で、被告人の白雪姫に対する殺人の故意があったと認めるには、合理的な疑いが残ると言わざるを得ず、結局、本件公訴事実については犯罪の証明がないことに帰するから、刑事訴訟法336条により、被告人に対し、無罪の言渡しをする」

裁判長「これで閉廷します」

(了)

起訴状

2019年6月14日

九州国際大学地方裁判所 御中

九州国際大学地方検察庁
検察官検事 ニャン猫

下記被告事件につき公訴を提起する。

記

本籍 東京都千代田区千代田1番1号 カリオストラの城
住所 本籍に同じ
職業 王妃

(勾留中)

美魔^{ミマ}ジョオウ

1963年12月9日生まれ

公訴事実

被告人は、2018年11月に婚姻した国王の長女白雪姫(当17年)が被告人よりも美しいことに嫉妬するあまりこれを殺害しようと企て、その際、白雪姫が重度のリンゴアレルギーであることを奇貨として、リンゴ入りカレーライスを同人に食べさせれば、同人がアナフィラキシーショックにより死に至るものと考え、2019年3月25日午後1時頃、千葉県浦安市舞浜1番地1所在の小人の家に寄宿する同人に対し、自らが調理したカレーライスを食べさせ殺害しようとしたが、これを遂げなかったものである。

罪名および罰条

殺人未遂 刑法第43条、44条、199条、203条

冒頭陳述書

九州国際大学地方裁判所 御中

2019 年 6 月 21 日

被告人 殺人未遂 美魔^{ミマ}ジョオウ

九州国際大学地方検察庁
検察官検事 ニャン猫

検察官が証拠により証明しようとする事実は、下記の通りである。

記

第一 被告人の身上・経歴

被告人は、1963 年 12 月 9 日、埼玉県城之内市ベガサス町に一人娘として出生し、幼少のころから頭がよく、何でも器用にこなし、近所からも評判の美少女として両親から甘やかされて育った。2018 年 11 月、東京都千代田区千代田 1 番 1 号、カリオストラの城の王、美魔オウと婚姻したことで、女王となり、被害者である白雪姫の義理の母となった。2019 年 1 月、美魔オウが病死したことで、現在被告人ジョオウが右城の城主となっている。

第二 本件殺人未遂事件に至る経緯

一 被告人は、自身が世界で一番美しいと思っていたが、自己の所有する鏡から「白雪姫が一番美しい」旨の発言がなされたことにより、自己が一番ではないことを不満に思い、被害者白雪姫に対し嫉妬するようになった。

二 被告人は、何とかして自分が世界一美しくありたいと思い、そのためには白雪姫を亡き者にすれば自己が世界一になれると考え、その際、白雪姫が重度のリンゴアレルギーであることを知悉していたことから、リンゴ入りのカレーを被害者に食べさせれば、アレルギーによるショック死を起こすのではないかと考え、事故に見せかけた白雪姫の殺害を思い付いた。

第三 本件殺人未遂事件の犯行状況

一 被告人は、本件殺害計画を実行に移すべく、2019年3月25日午前6時頃、自宅カリオストラの城の調理場でリング入りのカレーを調理した。

二 被告人は、確実に白雪姫を殺害するためには、右カレーの中にリングが入っていることが被害者自身はもとより、第三者からも容易に判別されてはならないため、調理時にリングを細かく裁断するほか、目視においてリングが識別不能な状態になるまでカレーを煮込み続けた。

三 被告人は、情を知らない家臣、城家臣に対し、右カレーを、当時白雪姫が所在していた、千葉県浦安市舞浜1番地1の小人の家のもとへ届けるよう指示した。

四 同日午後1時頃、被害者白雪姫は、家臣によって届けられたリング入りカレーを、カレーの中にリングが使われていることを知らずに摂食し、リンゴアレルギーによるアナフィラキシーショックを起こし、意識不明の重体に陥り、現在もなお意識不明のまま入院中である。

第四 情状

被告人は、被害者白雪姫に対する自己の嫉妬心から身勝手にも殺害しようと犯行に及んだものであり、白雪姫が重度のリンゴアレルギーであることを知りながら、これを悪用して事故を装った殺害計画を立てるなど、犯行動機においてはもちろん、その殺害方法においても悪質であるほか、本件が発覚してからもなお、反省している様子は微塵もうかがえず、情状は極めて悪質である。

以上

令和元年（わ）第 123 号

被告人 美魔ジョオウ

弁論要旨

九州国際大学地方裁判所 御中

2019 年 6 月 28 日

弁護人 ワン犬

第一 基本的主張

本件は、白雪姫がリンゴアレルギー体質であるということについて被告人の一切知らない中で起きた、単なる事故に過ぎず、また、リンゴ入りカレーを調理した被告人の行為は母親としての愛情の発露から出たものであり、白雪姫を殺そうとしたものではない。よって被告人は無罪である。

第二 本件事故に至る経緯について

一 被告人は、1963 年 12 月 9 日、埼玉^{しやうのうちし}県城之内市に九国太郎とその妻花子の長女として出生し、ほかにきょうだいはおらず、両親の愛情を一心に受けて育てられた。

二 被告人は、2018 年 11 月 5 日に美魔オウと婚姻し、義理の娘となった白雪姫を夫美魔オウと共に、自分の実の娘のように可愛がるなどして幸せな家族生活を送っていた。しかし、翌 2019 年 1 月、美魔オウが、当時流行していた感染症により死亡した。

三 被告人は、オウの死後、白雪姫に対し、今まで以上に強い愛情を注ぐようになったが、これは、自分も両親の愛情を一心に受けて育った経験から、白雪姫に対しても、片親だからという理由で不満を感じないように愛情を注いだものである。

第三 本件事故の状況

一 被告人は、2019 年 3 月 25 日午前 6 時ごろ、入手困難な珍しい美味しいリンゴが手に入ったので、是非とも白雪姫に食べさせたいと思い、リンゴ入りのカレーを作った。

二 被告人は、白雪姫がリンゴアレルギーだという事実を知らなかったため、当然のようにカレーの隠し味としてはリンゴを使うものと考えたのみならず、珍しいリンゴを使用し

たカレーであるから、むしろ喜んで食べてくれるものと確信していた。

三 被告人は、家臣に対して、出来上がったカレーを白雪姫のもとに届けるように指示し、これを受け取った白雪姫はそのカレーを食べ、リンゴアレルギーによるアナフィラキシーショックを起こしたものである。

第四 結論

本件は、リンゴアレルギーだという事実を知らずに、白雪姫がそのカレーを食べ、アナフィラキシーショックで倒れるという不幸な事故であり、被告人の行為には娘に対する母親思いの愛情こそあれ、ましてや殺人の故意が介入する余地は微塵もない。よって被告人は無罪である。

以上



写真 1

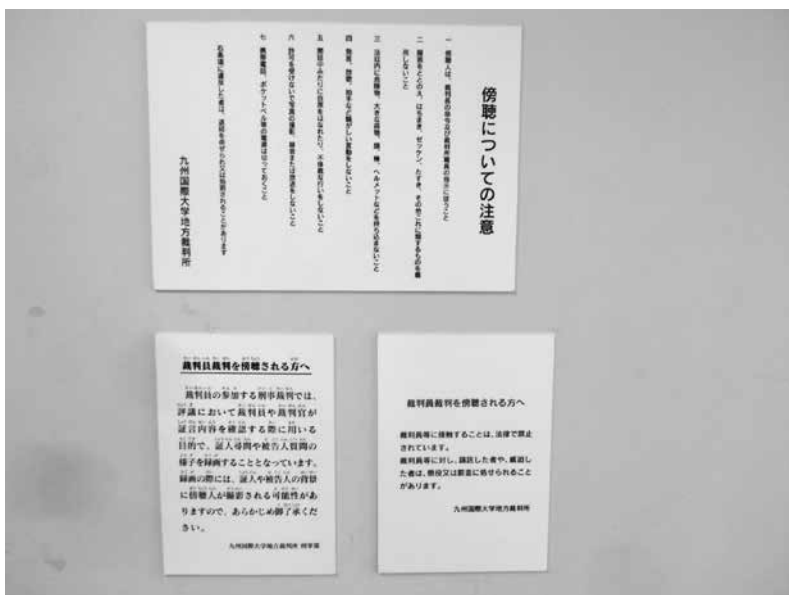


写真 2

写真1 法廷教室出入口ドア(傍聴人側)の様子。以前の注意書きが貼り紙であつたものから変わって、プラスチック製のパネルになった。なお、写真は「開廷中」のランプを消灯したところ。これらのエピソードについては24巻3号(2018年3月)の拙稿を参照。

写真2 パネル拡大。